

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



陽備分教会

(2月23日撮影)

立教179年
3月号

教祖にお喜び

いただける成人を

2・21 学生層育成者講習会 開催

学生担当委員会

大教会学生担当委員会(山野弘

実委員長)は2月21日、深谷太清先生(本部学生担当委員・やまとよふき分教会長)を講師に迎え、大教会2月月次祭後に「学生層育成者講習会」を開催、230人が参加した。学生層をはじめとする道の後継者育成の重要性を理解すると共に、活動を広めていく事を目的に毎年開催しているもの。

深谷先生は、今、年祭を終えて新たな歩み出しにあたり、親に心を合わせ、ちびに心を寄せることが大事と話された。

講話要旨は次の通り。

神様の方に自分を合わせる

丁度私ここに到着した時に、おつとめは「いちれつすまして甘露台」という時でした。甘露台は、昨年10月24日に、据え替えの儀が行われました。前の甘露台は15年間おちびに据えられ

ていたようですが、上が空いていて雨風にさらされますので、黒ずんで、かたりしてきた。真柱様は、「そうしたことは一つのきっかけではあるけれども、それ以上に大切なのは、この据え替えの儀を、改めて私たちがしっかりと自分の心をおちびに向けているか、自分の中に果たしてどれほど神様が入っているのか、自分の信仰信念を改めて見直す機会にするように。」とお仕込み下さいました。あくまでも甘露台は初めから自然にあるものではなく、据えられたものです。同じように、

私たちの信仰も生まれた時から自分の中に信仰があるのではなくて、親の影響を受けながら、だんだん自分の考え、いわゆる人間思案というものができてきます。その人間思案と神様のお心、人間思案を横に置いて、神様の心に合わせる事が私たちの信仰です。しかし、日々の生活では頭では分かっているも人間の都合が先立って、理を軽くしてしまう。そうしたことを改めてお仕込み頂いた気がします。

その後にある先生が、さらに15年前の甘露台の据え替えの儀についてお話し下さいました。15年前の平成12年、実はおつとめが勤められる最中に、ど

なたかが結果を乗り越えて神座に降りていって甘露台を倒してしまったのです。甘露台が倒されたその時の件が、九下り目の九つだった。

こゝでつとめをしてあげれど

むねのわかったものへない 九下り目9

おつとめをしていても胸が分かった者はない、その時に甘露台が倒された。甘露台を押し倒したのではなく、引いて倒したのですが、その後、前真柱様より「神様を自分の方に引き寄せるような信仰をしていないか、私たちの信仰はあくまでも自分たちの考え、人間の思案を神様の方に合わせるのであって、決して神様の方を自分の都合のいいように合わせるのではない。」と、お仕込み下さったということでした。

信仰を振り返り

陽気ぐらしの生き方を問う

普段はあたかも信仰しているような気ではいても、果たしてどれほど自分を神様に合わせているか。うちの祖父がある時、「参拝をする時に手を合わせるという事は、私たちが神様にしっかりと心を合わせるといふことやで。どれほど手を一生懸命合わせていても心が神様に合っていないかったら、

それは心得違いやで。」というお話を聞かせてくれました。みかぐらうたの中に

なんぼしんくしたととも

こゝろえちがひはならんぞへ 六下り目7

とあるように、おつとめをする心がどれほど神様の思し召しに沿っているか、改めて思案しなければならぬと思いました。

甘露台というのはいちれつを澄まして立てるのですから、大切なことは心を澄ますことだと、お聞きします。この心を澄ますということについて真柱様は、諭達の中で、心を澄ますというのは陽気ぐらしの生き方だと、お聞かせ下さいました。自分の心が澄んだかどうかを知る一番の方法は、

心さいすきやかすんた事ならば

どんな事でもたのしみばかり 十四50

というおふでさきから、日々どんな事が起こってきても、それを楽しみなあと思えてきたら、心が澄んできたということかと思えます。心が澄んできたならば、「人が何事言おうとも神が見ている気を静め」と、人がどんな事を言おうとも、特に気にならなくなってくるわけです。人が嫌なこと言ったらカッとなって腹が立つことは



お話し下さる深谷先生

ありますよね。しかしその後が大事で、「あつこれだな、神様からお聞かせて頂くのは。この時にこそ、その教えを活かす時だな。」と思つて、悪しきがあつた時には、「あしきをはろうて」と、自分の胸を払うんだ、ということをお聞かせ下さっていると思うのです。そしてさらに、自分の中にほこりの心遣いがあつたと気づけたのは、その人が自分に嫌な事を言つてくれたおかげで、自分の心の掃除ができるんだと思えるまでになつたならば信仰もかなり進んできたとお聞きします。そうして私たちが、心がだんだん澄んできたならばどんな事でも楽しみになつてくるのであり、それこそが陽気ぐらしの生き方であると諭達でお教え頂いたわけです。

自らが身をもつて信仰を示す

そうした諭達の精神に基づいて仕切つて成人の日を歩んできたのですが、私自身どれほど自分の心が澄んだのかと、反省することが多いわけです。私たちはよふぼくとして、まずは自らの心を澄ますことが大切ですが、毎日、「あしきをはろうてたすけせきこむいちれつすまして」と神様が救いを急いでおられる。ですから一日も早く自分の身の周りの方から心を澄ませるようにおたすけをさせて頂くわけです。その心を澄ますということと共に、行うことが、育成活動においては非常に大事かと思ひます。子供たちはどのようにして信仰がわかるようになるのか。例えば、子供たちにコップというものをお教えしようとした時に、口でどれほど、「コップ」といつても、見たこととがなければ、その子供はコップというものを理解しないと思うのです。このコップを指し示しながら子供に、「これがコップだよ」と言えば、子供は理解するわけです。必ず言葉と目に見える姿をセットにするから、子供はだんだんとそのことを理解していくと思うのです。しかし子供に、「親孝行しな

さいよ」と言つても、身の周りに親孝行している姿がなければ、親孝行というものがわからないと思うのです。最近核家族化が進んで、親と一緒に住んでいないので、子供に親孝行の姿を見せる機会がない。子供に伝えるべきものは、言葉だけでなくその姿をもつて伝えていくと考えた時に、少々我慢してでも親と一緒に住んで、その親の世話取りを一生懸命させて頂く。私たちの信仰は今の苦勞を先の楽しみとして、自ら進んで苦勞の道を歩むこと、そこに大切な育成のポイントがあると思ひます。

信仰を伝える苦心をする

さて、信仰を子供たちに伝えるとは、目に見えない神様をどのように子供に伝えるかということであり、そこに色々な苦心があると思ひます。

実は、年祭が始まつてから、うちの教会にバスケットゴールが置いてあるのですが、近所の子供たちがだんだん遊びに来るようになりました。よく考えてみると神様がこの子達を引き寄せられたのだと思ひ、「ここは教会でバスケットゴールがあるのはここに神様をお祀りしているからや。神様がお

いでにやらなければ、敷地もない。敷地がなければバスケットゴールも置けないわけだから、まずは神様に一言お礼しに行こう。」と言つて、小学生の子供達と一緒にお参拝をしたのです。そして、「これからは遊ぶ前に、必ず神様にご挨拶をしてから遊んでね。」と付け加えました。後日、また姿を見たのですが、子供たちは「入りまーす」と言つて神殿のほうに入つて来ました。子供たちは、「パンパンパンパン」とお参拝をして、「はい行こう」と。そこで、「ああ、待つて、待つて。それは手を叩いているだけだよ。お参拝というのは、心を神様に合わせるのだよ。その姿が手に表れて手を合わせているのだよ。」と説明したのです。

子供たちに目に見えない神様をどうやって伝えるか。その時初めて私自身にご褒美の宿題を渡されたようで、その子供たちと一緒に成人の道を歩むようになりまし。実際は、私はほとんど教会にいませんので、女子青年さんが、その担当になつてくれました。「子供たちには必ずお参拝をしてもらってください。そして、たとえ少しでも神様を感じてもらえるようにやつてね。」と伝えて任せていたわけです。お陰で女子

青年さんは色々知恵を絞り、心を使つてその子供たちと一緒に、この年祭活動を行って下さいました。後で聞くと、

女子青年さんの1人は、子供たちが来た時に、廊下を歩いて神殿に向かうのですが、「これだけこの廊下が長く感じたことはありませんでした。」と。

私も皆さま方の前でどんな話をさせてもらったらいのかと、心の中で葛藤しながら神殿へと歩くこの廊下が一番かなわない。そういう意味でその女子青年さんが何気なく歩いてきた廊下が、重みを持って歩ける神様へ繋がる廊下になって良かったなあと、非常に喜ばせて頂きました。

世界だすけの用材として

実際に子供に伝わるかどうかは、親神様、教祖がお働き下さるかどうかがあって、上手に言ったからといって、子供に必ずしも信仰が伝わるものではないと思うのです。これは、人間の知恵や力で広めてゆくものではなくて、月日親神様が入り込まれて、教祖を通じて広めて下さるのだと。そのお手伝いをさせて頂く、お手伝いどころか、とにかく使つて頂く、それが私たちの

役目でありませぬ。だからこそ、私たちのことをよふぼくと仰せ下さるので

す。木は沢山あつても實際どの木を使うかとなると、やはり使える木もあれば、使えない木もあると思うのです。特に、この神様の神殿を建てる木は、そんな

じよそこらの木ではだめだと思つて、ここで世界中の人の助かりを願うおつとめおつとめるわけですから、それに耐えうる、ふさわしい木を探してきて、一番いい木を使いますよね。お道の人材、よふぼくというのは、

このききょうかあおいしと

おもへどかみのむねしだい 八下り目9

というお歌がありますが、神様がこの木を切ろうか、どうかをお考えになる。皆様方はほとんどよふぼくかと思つて、皆、神様から陽気ぐらしの人材として山から切り出されてきた。しかし、原木のままでは使えないから、その木をこの神殿の上段のように磨きをかけていく。その過程を、手入れ、とお聞かせ下さいます。

にちくによふぼくにてわていりする

どこがあしきとさらにをもうな 三131

と、神様はそのよふぼくを使いたいから、どんどん手入れする。それは決して

悪しきことではなく、むしろ神様の大きなご期待なのだとお聞かせ下さるわけです。

子供の成人を促すお仕込み

いずれにしても、私たちはよふぼくとして引き寄せられ、よふぼくとして使うために色々な手入れを頂いて、心を磨いて頂く。また見せられている本人ではなく、周りに対するお仕込みであるということも、よくあるようです。

考えてみますと、このお道が始まった状況では、教祖ご自身がご身上になられているのですね。そして3日間飲まず食わずで命がなくなる、ここに至つてはお引き受ける以外ないと、問答の末、夫・善兵衛様が、「みきを神の社に差し上げます」と、お返事をされたのです。そしてそれから50年経つて、再び教祖に身上を見せられるのです。

正月に教祖は、お風呂をお出ましの際に、ふと、よろめかれて、もう息も止まるぐらゐまで重篤になられた。その時に当時の人々は、自分の命を捨ててもおつとめしようという決断をされたわけです。ですから、普通に考えたら、身上を見せられた人が思案をしないといけないのですが、この場合は親

の身上に通じて、子供の成人を促されたわけです。教祖は、子供可愛いゆえに、御自らの身上を通じて、更には、

25年の命を縮めてまで、私たちの成人を促し下された。ですから、少なくとも私たちは、その親心に何とかお応えしたいと思つて、年祭活動を3年間仕切つて勤めさせて頂いたわけです。

そして年祭を迎えて、一区切りがつかまりましたが、ここからがむしろ大切だと思ひます。元始まりのお話の中で、三度の産み出しと出直しを通じて、五分から生まれた人間は、五分五分と成人し九十九年たつて、三寸になった時に、出直してしまつた。その時に、父

親なる「いざなぎのみこと」もお姿を隠された。しかし、母親なる「いざなみのみこと」は、その場に就つて、再び、二度目の宿し込みとお産み出しをして、また五分五分と成人をして、今度は、三寸五分までになった。しかし九十九年経つて、また元に帰り、三度目の宿し込みとお産み出しが行われて、五分五分と生まれて、四寸になった。この元始まりのお話は、成人といふのは、右上がりにずっと続くのではなく、ある程度までいって行き詰まつた時には、必ず元に帰つて、また元か

ら始める、この大切さをお聞かせ下さっていると思います。色んなことに慣れてきたり、立場ができる、初心を忘れて、人に言うばかりで自分が成人の道を歩まなくなる。そうした時に、一度、元一日に帰って、自分自身が何故信仰するのかを問い、まず自身が毎日喜び勇んで、成人を指す。それが信仰の喜びであり、だからこそ、人にも伝えることができるわけです。

しかし、その三度目の成人をなし終えた時に、親はここまで成人すれば、やがて五尺の人間になるだろうと、にっこり笑って身を隠されました。それがまさに明治20年陰暦正月26日と重なるような気がするのです。教祖は、当時の先生方が命を捨ててもというところまでなつて、おつとめを勤めた。そこまで成人してくれたその姿を見て、安心してにっこり笑って、身をお隠し下さったわけです。

親の心を探る

しかしその後、子供たちは母親を慕うて、皆出直してしまふのです。そして、今度また生まれてくる時には、虫、鳥、畜類と八千八度の生まれ変わりを経て、最後にメザル一匹が残った、と

あります。このことを思案した時に、その後の道の歩みは必ずしも真っ直ぐ進んではなく、紆余曲折があったことと重なります。

実際に、教祖がお姿を隠された21日後、飯降伊蔵先生が、急に身上になられるのです。肋骨が順番に折れていくほどの痛みがあり、このままでは命がなくなってしまうというような、大変な状況があつたようです。その中で神様のおさしづがあつて、今までは飯降伊蔵先生を、ほこりの仕事場、つまり身上や事情をお伺いする役目として使っていたが、「これからは、綾錦のさらにその上に絹を着せたような、本席としての仕事をさせてやりたい。それを承知できるか。」と当時の人々に仰せになるのです。しかし、今ではから本席様として理解できますが、これまで同じように一信者として通つていた人を、本席と受け入れる、その心はずぐには作れなかつたと思うのです。しかし2週間後に、当時若干25歳の眞之亮様が、決断をされて本席と定まつたからこそ、広くおさづけをお渡し下さるようになったのです。

そのことを現在に重ねると、例えば色んな教会の事情があつた際に、しつかり理を立てて、収めることが出

来るのかという状況と似ているかもしれません。親に何えはつきりするわけですが、親の姿がない状態で、どうやって人間思案ではなく親の思いに近づいていくのか。これが親が姿をお隠しになられた後の、子供の成人だつたと思うのです。その時に、特に大切なのがおさしづだつたのです。つまり、自分で判断するのではなく親に何うというその心があつたからこそ、その後20年間、誤りなく教祖のひながたを元に、今日までお道が進んできたということですね。

親に心を合わせ、ぢばに心を寄せる

今、年祭を終えて新たな歩み出しにあたり、親に心を合わせ、ぢばに心を寄せることが大事だと思います。(来月)3月28日に、「春の学生おぢば帰り大会」という学生対象の行事ですが、学生だけではなく学生を育てていく者もおぢばに帰り、真柱様から学生層育成についてのお仕込みを聞かせて頂くことが、大事だと思ふのです。まずは自分の子供たちに、そして教会につながる若い子達を、おぢばにお連れ帰り頂きたいと思ふます。今は若い世代がないところも、必ずこれから10年の内に出会う機会があると思ふます。そ

の時に親の思いを伝えられるように、まずは私たちが共々に(来月)の3月28日におぢばに帰らせて頂きたいと思ふのです。10年に1度の、「教祖30年祭おぢばがえり大会」と銘打つて、学生さんは、1万人を目標して必死に、にいがけ・おたすけをしてきています。私たちはその思いを後押しするだけではなく、私たち自身も、各教会1人以上の方を連れておぢばに帰りたいと思ふ、動いています。おぢばから色んな親心をもつて若者の育成のための行事を打ち出して下さっています。しかし、私たちにそれにお応えしたいという心がなければ何を外してしまうと思ふのです。先の神殿講話において真柱様は、育成においてすぐに結果を求めることなく気長に丹精して頂くことも大切であるけれども、もう一方においては何を外さないということが大事だとお聞かせ下さいました。そういった意味では、今年の色んな行事において一歩かけるだけで、その子の運命が変わるかも知れないのです。親の声に素直に共々にお応えして、年祭後、真っ直ぐに教祖にお喜びいただけるような成人を歩ませて頂きたいと思ふます。ご清聴有難うございました。

教会長講習会 開催

2・25〜26

布教部

布教部(田中隆之部長)では、2月25日から26日にかけて「立教179年教会長講習会」を詰所を会場に開催、92人が参加した。テーマは「年祭で培ったものを今後の道につなげる」。

開講に当たり田中同部長からプログラム、趣旨説明があり、その中で真柱様の教祖百三十祭への思いを話した。

25日は、参加者を12班に分け、年祭活動の取り組みを振り返る。今後の活動を展望する―について意見を交わした。その後、本部東礼拝場で参加者全員、大教会長様の身上回復を願って、お願いづとめをつとめた。26日は各自で本部朝づとめ・3月祭典を参拝して終講した。



管別練習風景



奈良市内を神名流しする学生たち

雅楽勉強会 開催

3・6

雅鶯会

大教会において、3月6日(日)、雅楽初級者と初心者の方の勉強会を開催しました。受講者は少年会員と大人含め20人の参加者で、指導にあたって下さる先生方も忙しい御用の合間をぬって、また遠方島根より駆けつけて下さり、熱心に取り組むことが出来ました。午前中は各管に分かれて管別練習、午後からは各管合同練習を行いました。

た。今日初めて管を持つ人もいましたが、一日の練習で音も出るようになり、将来教会の楽人として勤めて下さる日も近いでしょう。今後も雅鶯会では、初心者、初級者の勉強会を通して、雅楽に親しんで下さる方の層を広げていきたいと思えますので、次回の勉強会にも、少年会員、大人問わず、声かけをして下さいますようお願い申し上げます。又、指導に当たって下さいました先生方には心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

学生生徒修養会 大学の部開催

大学の部開催

3月3日から9日まで、学生生徒修養会・大学の部が親里で開催され、各地の大学生・大学院生・専門学校生ら539人が受講し、笠岡からも5人が受講した。「おやさまの御心を求めて」のテーマのもと、学生は参加回数と学年に応じて5つの塾(宿舍)に分かれ、修養に励んだ。プログラムは、講義や修練、ひのきしん、お互いの事を話すグループタイムなど、学びと実践の両方が組み込まれている。にいがけは、大阪・京都・奈良の市内に向き、神名流し・路傍講演・戸別訪問を行ったが、その中に御存命の教祖のおはたらきを感じる学生も多かった。学生は1週間を通して、自らの信仰と向き合い、御心を求める姿勢を培った。

また、3月6日から8日にかけて、「学修・高校卒業生コース」も開催された。今回で2回目の開催となる同コースには、この春、高校卒業予定の高校生235人が受講し、卒業後もおちばや教会に心をつなぐ事を誓った。



「助け合い」のお話し

少年会笠岡団では、2月21日(日)大教会祭典終了後「テッチャンシアター」を開催させて頂きました。
今回の担当は少年会副団長藤井正仁先生です。今月は久しぶりの日曜日という事でたくさん少年会員たちが集まってくれました。期待を胸にワクワクする子供達の前で藤井先生が話し始めます。「みなさん、サルのまねをしてください!」「え?」と言いながら子供達は可愛いサルになりはじめま

「テッチャン
シアター」開催
2・21
少年会

す。そのあとに何種類かの動物のマネをしてから話しは続きます。「皆さん、この逆はないんですよ」、そうですネ。言われてみればいくら少子化が進んで人が減って動物が増えたとしても、動物が人間のマネをするという事はありません。

人間は遠い昔、虫・鳥・畜類と八千八度の生まれ変わりを繰り返してきました。(元の理より)その長い年月の間に、人間はいろいろな経験を積み重ねてきました。たとえば、人がお互いに助け合うという事もたくさんの経験の中からそれが幸せになることだ(楽しく暮らしてゆける)という事に気づき、今の平和があるのだから私達はお互いに助け合って仲良くしていきましょう。と締めくくられました。

楽しくまた真剣にお話しに聞き入っていた少年会員たちは、お下がりのおやつをもらって解散しました。短い時間でしたが、ぐっと詰まったお話しに大人の私でも「フーン、そうなんだ」と思わせて頂きました。3月21日は祝日なので「テッチャンシアター」を開催する予定です。大教会でお待ちしています。

(少年会委員 丸山哲子)

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていますので転載いたします。(敬称略)

▼『天理時報』

▽2月28日付「時報俳壇」

・芦品◎ 金谷眞佐代さん

婿むこよりのお節せち会のお餅もちやれ嬉うれし

▽3月13日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡◎ 藤井光子さん

父に似て相撲好きなり

がぶりより琴奨菊の初優勝祝う

・福満◎ 福島悦子さん

草を引く近きに鳥は啄つばみぬ

聴こえぬわれを知っていること

▼『陽気』誌3月号「道柳」より転載。

▽佳 詠

・東悠◎ 田林美智子さん

分を知り徳いっばいに生かされて

▼表紙写真

(虫明立生かさおか編集部員)



修養科生の声



百三十年祭の旬に

惠陽分教会 藤 本 道 喜

今回二度目の修養科に入学をさせて頂き、いろんなことを経験させて頂きました。詰所でのもちつきひのきしん、年末本部でのひのきしん、そして正月の本部でのもち焼きひのきしんと、普段では経験のできない事をいろいろさせて頂きました。そして百三十年祭という旬の年におちばでふせこませて頂いた事、本当に心に残る想い出となりました。また修養科では担任先生の授業のはじめにおさづけの取り次ぎ合いをして、多数の方におさづけを取り次いで頂いたり、取り次ぎさせて頂くなど本当にありがたい事だなと感じさせて頂きました。おかげさまで三ヶ月間元気で通らせて頂く事が出来ました。これから教会に帰りましても、修養科で学んだ事をいかして、低い心で通らせて頂き、おさづけの取り次ぎ、人助けにと頑張らせて頂きたいと思っております。

年祭の理

皆部分教会 河原 喜一郎

ある修養科生が、生卵一パックとプリンを買ってきた。夜食にしようと思つたのである。すると、その日の夜に生卵一パックとプリンが某所より差し入れられた。さらに別の日、生卵一パックとラーメンと某飲料を買ってきたが、晩飯を食い過ぎたことであるし、今夜はラーメンを我慢しようと思つていた。するとそこへ生卵一パックとラーメンと某飲料が差し入れられた。

おせちひのきしんの餅焼き現場で、「なまもーち！なまもーち！」などと奇声を発してた、はしやぎをするおっさんがいたという。その近くにいたある修養科生は、彼に対する腹立ちを募らせ、朝礼などで顔を見る度に怒りを再燃させていた。するとどうなるか。三ヶ月間で一度しか出席しなかつた教祖殿でのおてふり学びで、なまもちのおっさんが、その修養科生の対面でおてふりをしているのである。

これらの他にも、興味深い同期生の出来事を修養科中に経験することができた。

一連の現象をどのように悟らせて頂けばよいか。そこそこ下らないので誰にも尋ねる気にならないけれども、ある教養掛の先生が「願いどおりではない、心どおりである。」というような話しをこれらの件とは別に下さったことがある。好きなラーメンや卵であろうと、嫌いな生餅のおっさんであろうと、心どおりのものが現実となつて目前に現れる。

おぢばとはありがたくもおそろしい所である。

月日よりたしかに心みきだめて

それよりハたすぢきもつ的事 九六三

K大教会の修養科生、F本氏のエピソードでした。

笑いで「うろのな」話

川島郷分教会 香取 満彦

この度、天理教本部修養科八九六期を無事修了させていただくことができました。送り出してくれた教会家族、お許し下さった上級会長様、大教会会長様、三ヶ月お世話下さった教養の先生や担任の先生等、たくさんの方のおかげかと思えます。修養志願の動機は身上を助けていただいたお礼のためでした。9月に体調を崩し、務めていた病

院を休んでいましたが、ちょうど百三十年祭の旬であることを思い出し、体調の回復後、修養科にておぢばに伏せ込ませていただくかと考えたのです。まず修養科に導いて下さったこと自体に不思議がありました。40年前の教祖90年祭の折、前会長の夫(祖父)が出直しました。私はその祖父の生まれかわりだと言われています。祖父の行きたがっていた年祭の修養科に、私は祖父の誕生日である11月25日に行かせていただくことができました。これは祖父の魂を持って生まれさせていたのだ私にもう一度生まれかわりをせよとの神様の思召してはないかと思わせていただいたのです。

いざ修養科に入学すると、ありがたい御用の連続でした。組係として、別席者の世話取り、おさづけの理拝戴の付き添い、年末年始、お節会、百三十年祭の受け入れひのきしん、クラスの皆様のお世話、お屋敷の延長であるつめ所のひのきしんなど、全く退屈なく神様にお使いいただいたのです。

その中で、自分も周りの人も助かっていく様をたくさん見せていただけました。車イスに乗った17歳の女の子が歩けるようになり、末期ガンの患者が、

明るい顔で健康に3ヶ月通れたり、その姿を見る内に、私も祈る時間、おつとめの時間が増え、祈る姿勢も変わっていったように思います。「あんな良い人はいない」と言われ、志半ばで倒れた祖父に少しでも近付くことが目標だった私にとって、うれしい事柄であり、私も救われたように思いました。

三ヶ月の間、これほど人のつながり縁を大切に思つたことはありません。クラスメート、担任の先生、笠岡の修養科生は皆、前々からの兄弟のよう、関係の中で様々な示唆を下さり、私を育てて下さいました。中でも「陰徳を積む」という言葉を胸に、主張を控え、見えないところで努力することを標語としてすごしたように思います。そうしていると、人の方から寄ってきてくれたり、困ったときに不思議と手助けをして下さる方があらわれたり嬉しいことが続出したのでした。このような神様、教祖の言うことが間違いないことを体験させていただける非常に心おどる三ヶ月を通らせていただいたことを。神様、教祖、周りの人々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

* 結 * 婚 * 相 * 談 * 室 * 設 置

—一人でも多くの方にお互い信仰のある良いご縁を
お世話させて頂きます。あなたの登録をお待ちしています。—

結婚相談室 かさおか「ピーチの会」

かさおか「ピーチの会」入会案内

▶ 趣 旨

- 各教会につながるようぼく男女の婚活を支援するため次のような活動をする。
- ①男性に対して消極的な方へのサポートをする(研修)。
- ②出会いの場を提供する(紹介、ふれあいパーティーなど)。
- ③教会と連携してカップル誕生を支援する。

▶ 申し込み要項

- 申し込み資格はようぼくです(別席運び中も可)。
- 所属教会の会長さんを通じて申し込んで下さい。
- 申し込み時に最近撮影した顔写真と全身写真を添付してください。

▶ 相談の進め方

- 各ブロックの担当者に
- ①連絡して大教会にて紹介カードを担当者と共に閲覧する。
- ②紹介カードの中に面談を希望する方がおられたら担当者から相手方に面談の可否をしてもらう。
- ③相手方が面談を了承した場合は、面談日・場所を調整して二方に連絡する。
- ④担当者同士が面談の当日の内容を取り決めて二方に連絡する。
- ⑤結果によって希望によりその後のお世話取りもさせて頂きます。

▶ ブロックの縁結びサポーター

- | | | |
|----------|--------|-------|
| ◎代表者 | 吉 岡 壽 | |
| ○東ブロック | 佐藤 香苗 | 岡崎 豊子 |
| | 香取 雅人 | 中島 誠治 |
| ○西ブロック | 桑田 恵美子 | 高木 孝子 |
| ○福山ブロック | 田中 隆之 | |
| ○高屋ブロック | 渡邊 美恵子 | |
| ○島根ブロック | 三代 温生 | |
| ○久松ブロック | 渡邊 眞治 | |
| ○上下ブロック | 丸山 哲子 | |
| ○府中市ブロック | 山田 敏教 | |

立教179年 定期巡教表

教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員	教会名	巡教月日	巡教員
廣町	2月13日	上原志郎	御野	2月8日	上原志郎	吳中	2月8日	岡崎真一
福廣	2月7日	大教会奥様	香地華	3月9日	田中隆之	大江橋	2月5日	今川昌彦
福勇	2月11日	中島誠治	真金	2月11日	中村剛	品治	3月7日	大教会奥様
福芦	2月9日	門脇元教	稲倉	2月13日	大教会奥様	久福	2月8日	谷内伸自
福満	2月8日	大教会奥様	稲瀬	3月5日	杉原博之	吳福	2月5日	三島涉
福岩	2月12日	門脇元教	稲富士	2月15日	中島誠治	鶴真	3月10日	田中隆之
西村	4月10日	森本忠平	稲讚	2月10日	中島誠治	川島郷	3月10日	吉岡壽
福年	2月7日	上原繁道	門司港	2月12日	岡崎真一	作備	2月6日	門脇元教
引野	2月6日	佐藤道孝	大恵山	3月12日	大教会奥様	輝華	3月13日	中村邦義
福昭	2月11日	森本忠平	東水島	3月10日	大教会奥様	錦ヶ原	2月3日	今川昌彦
福春	3月5日	今川昌彦	高児島	2月5日	門脇元教	行藤	2月11日	大教会奥様
福中	2月12日	佐藤道孝	高丸	2月6日	岡崎真一	真府	2月9日	今川昌彦
福富士	2月10日	門脇元教	出雲	2月11日	中村邦義	吉舎	2月4日	上原志郎
福東	2月9日	岡崎真一	瑞雲	3月6日	田中隆之	清嶽	2月5日	中村邦義
東福山	2月6日	杉原博之	海潮川	3月8日	田中隆之	上小島	2月10日	今川昌彦
福南	3月13日	谷内伸自	錦洋	2月14日	中村剛	木津和	2月6日	上原志郎
福順	2月11日	岡崎真一	米府	2月15日	中村剛	國須	2月7日	門脇元教
福節	3月8日	今川昌彦	弓ヶ濱	2月8日	佐藤道孝	上吉野	3月12日	田中隆之
福備	2月3日	大教会長様	西伯	2月9日	佐藤道孝	上備	2月8日	杉原博之
福輝	3月13日	吉岡壽	米美	3月5日	上原繁道	河佐	2月4日	中島誠治
坪生	3月5日	大教会奥様	伯仙	2月10日	佐藤道孝	上川邊	3月12日	上原繁道
八尋	2月10日	森本忠平	照雲	3月6日	上原繁道	甲井	3月6日	中村剛
深安	3月6日	中村道徳	松都	2月7日	田中隆之	上父	2月7日	三島涉
笠尋	3月3日	中村道徳	樺島	4月3日	杉原博之	阿木行	3月2日	今川昌彦
芦品	2月13日	上原繁道	新輝豊	2月3日	岡崎真一	宇津戸	4月5日	三島涉
安那	2月8日	吉岡壽	亀田山	2月12日	吉岡壽	河面	3月8日	大教会奥様
芦田川	2月3日	吉岡壽	出雲川津	2月10日	中村邦義	府世原	3月12日	上原繁道
三郡	3月10日	上原繁道	天場山	2月8日	中村道徳	神驛	2月5日	中島誠治
芦常	2月5日	上原志郎	簸ノ川	2月10日	中村道徳	神免	2月8日	三島涉
芦加茂	2月6日	谷内伸自	多古浦	2月13日	吉岡壽	葦沼	2月7日	谷内伸自
惠陽	3月14日	谷内伸自	瑞北	2月9日	中村道徳			
陽實	2月12日	上原繁道	雲東	2月11日	吉岡壽			

大教会だより

◎第八九六期修養料

自 立教178年12月1日
至 立教179年2月27日

*教 養 掛

三ヶ月間 横山逸郎
(東城分教会長)

一ヶ月目 津森朋之
(簸ノ川分教会長)

二ヶ月目 余村健
(多古浦分教会長)

三ヶ月目 三嶋正教
(笠尋分教会長)

*修 了 者

皆 部 河原喜一郎

惠 陽 藤本道喜

川島郷 香取満彦

高見島 瀬良和歌子

◎教人資格講習会修了者

立教179年3月12日終講

稲 倉 田 中文博

◎本部食堂ひのきしん

自 立教179年2月16日
至 立教179年2月22日

笠岡 岡崎佳夫
自 立教179年2月23日
至 立教179年2月29日
金浦 樋上謙二

◎大教会伏せ込みひのきしん報告

大教会婦人会ひのきしん係

自 立教178年2月19日
至 立教179年1月19日

●毎月19日の掃除ひのきしん

(4月は20日)

立教178年2月32人、3月31人、4月25人、5月37人、6月31人、7月33人、8月21人、9月42人、10月34人、11月33人、12月18人(子1人)、立教179年1月31人(子1人)。

●毛布襟付けひのきしん

立教178年9月3日55人、9月4日75人、計130人。

●神殿、信者室等 障子洗い張りひのきしん

立教178年10月3日69人(子9人)。

年祭に向かう最後の一年、大教会への掃除伏せ込みひのきしんありがとうございました。

炊事をはじめ諸行事には皆さんの力が欠かせません。動くことは勇みの種、伏せ込みなら尚更だと思えますので、遠方の方も1回でも参加できる様によりしく願います。



尚、19日には記念建物の掃除もできればさせていただきますと思えます。

先月二月二十六日ご本部月次祭終了後、午後から社会福祉課年頭研修会に参加させて頂いた。研修会の中で天理大学学長の飯降政彦先生が「なるほどの人 目指して」との題目でご講話された。冒頭で教祖百三十年祭には全国から二十万人の帰参者があつたが、初詣の名所などでは二百万とも三百万とも言われる人達が参拝されると言う。しかし神社・仏閣などの参拝者は縁起を担ぐお賽銭で一年間の無病息災・家内安全・立身出世・一攫千金などの自分や我が家の願いをこの一日だけで祈るが、教祖の年祭で帰られた多くは人のたすかりを毎日々願うする

人達であつたとその内容の違いを明らかに示された。そして年祭では多くの人が初席を運ばれたが、理の親はその人達がおさづけを拝戴して人だすけができるまでに成人して頂くたんせいに心を尽くしていかなければならない、と述べられた上で教祖ををやと慕う私達よふぼくは成程の人になるのではなく、いつまでも心低くなるほどの人に向かつて努力できるよふぼくになつて頂きたいと私達のあるべき姿勢をお話し下された。教祖年祭での三年千日では周囲のうねりとともに活発なおたすけ活動が展開されてきたが、かなめ会で打ち出された1、にをいがけ・おたすけ活動の定着化2、道の将来を担う人材育成3、教会長家族の丹精、これを心のスローガンに常時に戻るこれらを御教えに根差したよふぼくに成人できる様、そして次の旬の波に素直に乗る事ができるためにも日々を大事につとめてゆきたいと思う。(む)

